

魯迅の『小さな出来事』の空間的解読

李 国 棟

【キーワード】空間、S門、紹興会館、八道湾、白い大通り。

一、

中国の大文豪魯迅は『小さな出来事』という有名なエッセーを書いている。

一九一七年の冬、ある日、「私」は人力車で外出したが、北京のS門の近くで、車夫はぼろぼろの服を着ている老婆を梶棒で引き倒した。この事故によって、「私」は途中で人力車を降りざるを得なくなった。―魯迅はこのエッセーの中でただこのような「小さな出来事」しか書いていない。しかし、彼がこの「小さな出来事」から引き出した結論は大きいものであった。「私」は車夫に「かまうな」と言ったが、車夫はやはり老婆を助け起こした。そして、進んで彼女を交番に連れて行った。そこで、「私」は車夫の「偉大さ」を発見し、それと同時に、また自分自身の「毛皮の上着の内にかくれている『小ささ』」に気がついた。最後に、「私」は「ポケットから銅貨をひとつかみ取り出して」巡査

に渡し、「車夫にやっってください」と言って、現場を去った。

私はこのとき、急に異様な感覚にうたれた。車夫の、全身ほこりまみれの後ろ姿が、にわかになんか大きくなり、しかも、歩くにつれて大きくなって、仰ぎ見なければならぬほどになったような気がした。そればかりか、彼は私にとって、しだいに一種の威圧に変じ、さらには毛皮の上着の内にかくれている「小ささ」を絞り出しそうになった。（『魯迅全集』第二巻。学習研究社、一九八四年十一月）

これは『小さな出来事』の中で最も精彩を放った描写である。金があり社会的地位も高い紳士は、社会の下層にいる車夫に優良な品格を見出して褒賞しているだけでなく、また自己批判をして、自分自身の「小」を反省している。ここに、われわれは確かに魯迅の人格上の善良さと偉大さを認めることができる。し

かし、作品空間をよく分析すると分かるように、魯迅がこころで自己反省ができたのは、人格上の善良さと偉大さのほかに、もう一つの原因があるのである。

二、

車夫が老婆を引き倒したのは、なぜ「小さな出来事」と見なされているのだろうか？ テクストはわれわれに三つの原因を提示してくれている。第一の原因は「民国六年」、つまり一九一七年という具体的な時間である。第二の原因は「S門」の近くという具体的な場所である。第三の原因は「着ているものはほろずくめだった」という老婆の服飾である。

もし車夫は二〇〇二年に年配の女性を引き倒したら、これは「小さな出来事」だと考える人はまずいだろうか。たとえば、あるタクシーの運転手がある年配の女性を引き倒したら、事故の結果から言っても道義的立場から言っても、決して「小さな出来事」とはいえない。しかし、この事故は一九一七年に発生したのだ。この時代的背景から考えれば、それが「小さな出来事」と見なされていても何の不思議もなからう。

車夫が老婆を引き倒した場所は「S門」の近くであるというのが、第二の原因であるが、この「S門」はいつたい北京のどこを指しているのだろうか？ 当時の北京城の地図（本論の末頁に付した地図）を見れば、西北方向の「西直門」も、内城の西南方向の

「宣武門」も、みな「S門」と略称することができる。しかし、魯迅の当時の情況と結びつけて考えると、この「S門」は「宣武門」を指しているにちがいない。当時、魯迅は宣武門外南半截胡同の「紹興会館」、すなわち地図の西南方向の「菜市口」以南の⑬に住んでいた。そして、魯迅が当時勤めていた教育部も「宣武門大街」にあり、「宣武門」の上の一番目の十字路の近くの⑭が、それである。こういうわけで、魯迅は当時出勤と退勤の時には必ず「宣武門」を通っていた。それに対して、「西直門」は魯迅の住所からも勤務先からも非常に遠い。しかも、「西直門」の外は荒涼とした郊外であり、教育部の高級官吏である魯迅は、人力車でそこへ行く可能性がほとんどなかった。要するに、この「S門」は「宣武門」を指していると結論づけられるのである。

一九一七年当時、「宣武門」の外は北京の下等人居住区であり、貧乏人、俳優、田舎者および地方からの上京者などがそこに住んでいた。車夫という身分は、彼が下等人であることを示しているし、老婆のほろほろな服も彼女が下等人であることを示している。下等人居住区の中で下等人が下等人を引き倒したのだから、これは高尚な紳士の目には、当然「小さな出来事」としてしか映らなかつたのである。

この「小さな出来事」が発生した時、魯迅はすでに「毛皮の上着」を着、人力車に乗る高級官吏となっていた。それにもかかわらず、彼自身がまだ下等人居住区に住んでいたの、精神的に

はまだ地方からの田舎者という劣等感を持っていた―「私が田舎をあとに北京に来て、またたくまに、もう六年になった」という『小さな出来事』のファースト・センテンスがその例証である。したがって、彼はまだ下等人以上の次元からこの「小さな出来事」の意義を考へることができていなかった。言い換えれば、魯迅は当時まだ車夫および老婆と同じ空間に居るので、精神的には彼らを細かく観察する余裕がなかったのである。「小さな出来事」は一九一七年の冬に発生したが、しかし、『小さな出来事』というエッセーは一九一七年の冬には創作されなかった。その理由はまさにここにあるのである。

三、

『小さな出来事』は一九一九年十二月一日の『晨报・周年記念増刊』に発表された。魯迅はそれを小説集『呐喊』に収録した時、その末尾に「一九二〇年七月」と発表の年月を記入したが、これは魯迅本人の記憶の誤りである。この点については、一九八一年に人民文学出版社から出版された中国語版『魯迅全集』がすでに指摘し、しかも、「発表の年月および『魯迅日記』によれば、本篇の執筆時期は一九一九年十一月のはずである」と補足説明をしている。

それでは、魯迅の一九一九年十一月の日記を調べて、『小さな出来事』の創作時間を推定してみよう。

十九日 晴。昼すぎ、晨报館より手紙。
二十二日 晴。午前、晨报館に手紙。(後略)
二十四日 晴。午後、晨报館に手紙。(後略)

『小さな出来事』の発表時間から逆算してみると、十九日午後
の晨报館からの手紙は、晨报館の文章執筆の依頼書のはずである。二十二日、魯迅はその依頼を引き受け、承諾の返信を出した。二十四日午後、魯迅は約束どおり『小さな出来事』を書き上げて晨报館に郵送し、そして、一週間後、それが『晨报・周年記念増刊』に発表された。実際、書き上げから発表までかかったこの一週間は、ちょうど新聞社が原稿の受理、審査、版組および印刷をするのに必要な時間に合致している。この点から判断すれば、魯迅は一九一九年十一月二十二日から二十四日までの間に、『小さな出来事』を創作したということが明らかになる。

さらに、二十二日から二十四日までの日記を確認してみると、二十二日の昼すぎから夕方まで、魯迅は琉璃廠や歯科病院へ行くなどずっと外出していたし、二十三日の午後もずっと来客があったので、実際、魯迅が『小さな出来事』の創作に費やした時間は、二十二日の夜と二十三日と二十四日の午前中だけであった。そして、二十二日の日記中の、「夜、風ははなはだ激し」

と『小さな出来事』の中の「私は生計のため、朝早く出かけねばならなかった。：ほどなく、北風も弱まり、道のほこりも吹き払われて、くつきりと白い大通りだけが一すじ残され：」という叙述を結びつけて考えると、魯迅が『小さな出来事』を書き始めたのは、二十三日の朝にちがいあるまい。一九一九年十一月二十二日の夜から二十三日の朝まで吹き続けた風が、彼に一九一七年の冬のその人力車に乗った朝を思い起こさせたのである。

晨報館が魯迅に文章を依頼したからといって、魯迅はほかの事を書いても全く問題がなく、二年前のその「小さな出来事」を書かなくてもよかつたはずである。しかし、魯迅は結局二年前のその「小さな出来事」を思い出して書いた。ここには、またそれなりの内的必然性があるにちがいない。一九一九年十一月の魯迅日記をもう少し読んでみよう。

四日 晴。午後、徐吉軒とともに八道湾に羅氏と仲介人などに会いに行く。千三百五十元を支払う。家の受渡しすべて完了。（後略）

二十一日 晴。午前、二弟の家族とともに八道湾の家に転居。

一九一九年十一月二十一日、魯迅は宣武門外南半截胡同の「紹興會館」から新街口大街八道湾の大邸宅に引っ越した。当時、新

街口一帯は北京の高級住宅地であり、八道湾十一号は大きな「四合院」であった。ここに住むことだけで、主人の高い身分と強い経済力が自然に証明される。当時、魯迅の毎月の給料は三百元であった。対して、人力車夫の月収は十元程度にすぎず、人力車夫と老婆の事故を処理する巡査の月給はさらに低く、七元であった。比較してみると、魯迅の月収は彼らより三十倍も多かった。こんなに高い収入があるからこそ、魯迅は千三百五十元を一括払いしてその大邸宅に入ることができたのである。

もちろん、魯迅が引っ越しをしたのは家族団らんのためであり、決して自分自身の高い身分と強い経済力を顕示するためではなかった。これはその直後、魯迅が故郷へ帰り、その母親と妻を迎えてきたという事から見ても分かる。しかし、このたびの引っ越しは客観的には魯迅を下等人居住区から高級住宅地に移動させ、これによって、魯迅は下等人に絶対的な優越感を持つるようになった。たぶんその時に、魯迅は初めて「自分はもう田舎者ではないぞ」と実感したのであろう。

家を引っ越す前、魯迅は身分と経済力の面では遙かに下等人を超えていたけれども、空間と精神の面では相変わらず彼らと同じレベルにとどまっていた。しかし、家を引っ越した後、情況が全く変わり、この引っ越しによって、魯迅は空間と精神の面でも、下等人を遙かに超えることができたのであった。

魯迅が「紹興會館」から八道湾十一号に引っ越してきたのは一

一九一九年十一月二十一日の午後であり、『小さな出来事』を創作していたのは二十三日の朝であった。引越しと創作がこれほど緊密につながっているのは、このたびの引越しが魯迅に『小さな出来事』を創作する契機を与えたことを物語っているのではないかと考えられる。

道にはほとんど人影もなく、やっと人力車を拾って、S門へ向かわせた。ほどなく、北風も弱まり、道のほこりも吹き払われて、くつきりと白い大通りだけが一すじ残され、車夫の足にもいつそはずみがついた。

この引用における「白い大通り」は、すなわち地図の左側の、「新街口大街」から「宣武門大街」までの大通りを指している。魯迅日記によると、家を引越した翌日、つまり十一月二十二日の午後、魯迅は「琉璃廠」へ行った。「琉璃廠」は地図の下方にあり、「西河沿」以南の十字路辺りがそれである。「八道湾」から「琉璃廠」へ行くには、どうしても「新街口大街」から「宣武門大街」までの大通りを利用し、しかも「宣武門」を通らなければならぬ。その日、魯迅はこの大通りを沿って北から南へ、つまり、高級住宅地から下等人居住区へとやってきた。その時、魯迅の心には一種のそれまで一度も経験したことのない優越感が生まれ、そして、その優越感が彼に二年前のその「小さな出来事」

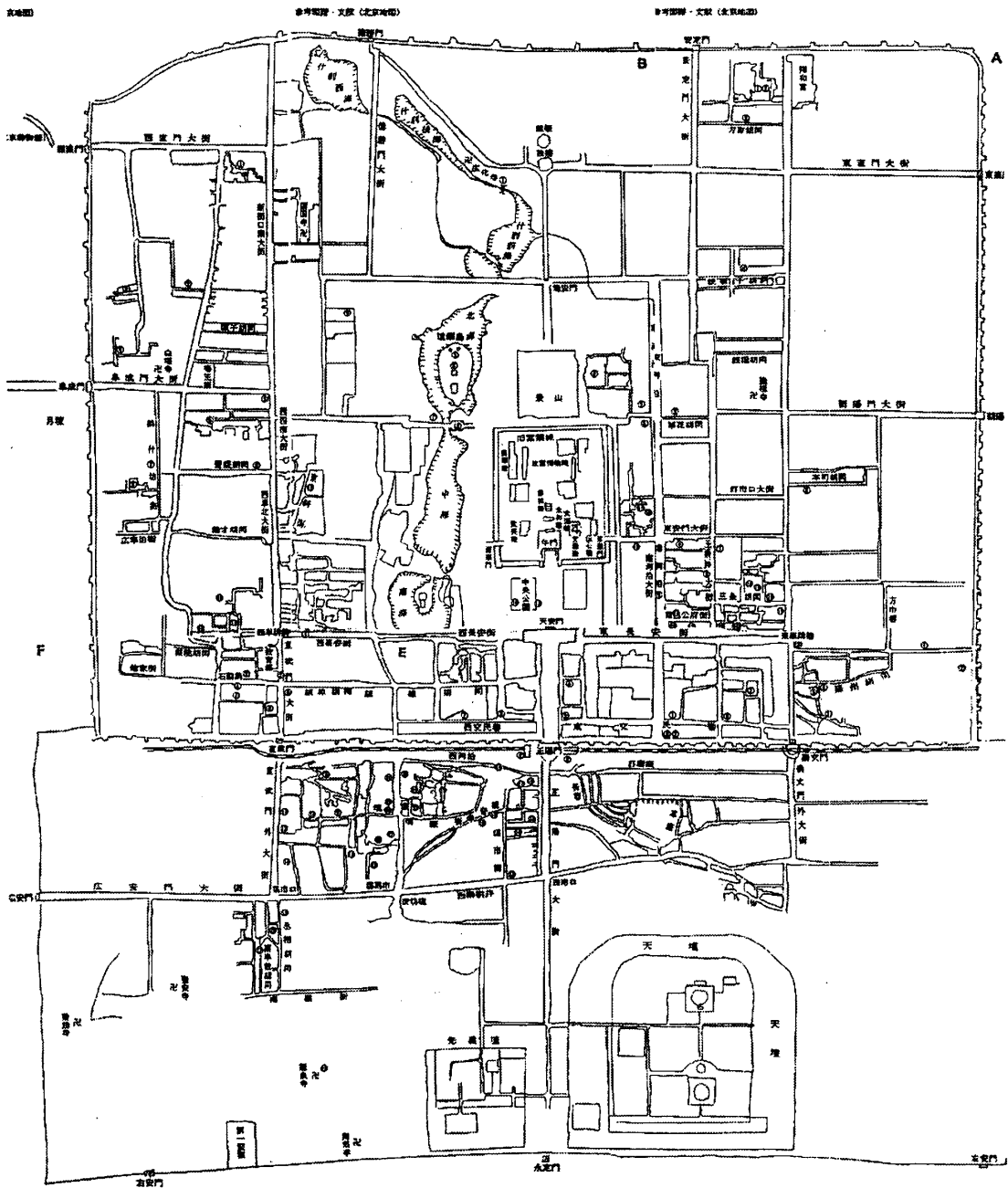
を思い起こさせたのであろう。実際、その「小さな出来事」が発生した時、魯迅は人力車に乗って「紹興會館」から「宣武門」へと行っていたはずである。この南から北への方向、しかも、下等人居住区の中に限ってこの空間移動は、決して魯迅に優越感と観察の余裕をもたらすことができなかった。しかし、二年後の一九一七年十一月二十二日、魯迅は北から南へやってきた。この北から南へ、つまり高級住宅地から下等人居住区への空間移動は魯迅に精神上の超越と自由を与え、これによって、彼は高い次元から下等人を細かく観察する余裕を得たのである。そして、素質としてもともと具えている人格上の善良さと偉大さが加わって、最後に、彼はついに人力車夫の偉大な品格を発見し、それと同時に、心の中では一種の紳士としての疚しさを深く感じ、自分自身の高すぎる身分とありすぎた金銭を恥ずかしく思ってしまった。「私」が「銅貨」を「ひとつかみ取り出して」車夫に与えたのは、すなわちその結果であった。『小さな出来事』の中では、「私」は銅貨を取り出すとき、「深い考えもなしに」と書かれているが、実際、十一月二十二日の夜、魯迅は「琉璃廠」から帰って『小さな出来事』を構想した時、きつと長時間考え込んでいたのであろう。

要するに、『小さな出来事』における車夫の偉大な姿は、魯迅の偉大な人格と高尚な身分の反射であり、「私」の自己反省は、すなわち魯迅の人格上の善良さと優越感から生じたものなのであ

る。『小さな出来事』が創作される原因として、善良で偉大な人格はもとより重要である。しかし、精神上的の自由と優越感もつと重要である。そして、魯迅にこの精神上的の自由と優越感を提供したのはほかでもなく、一九一九年十一月二十一日の引越しであった。その引越しがなかったら、『小さな出来事』も創作されなかったであろう。「新街口大街」から「宣武門大街」までのその「白い大通り」に、われわれは両者の間のこの因果関係をはつきりと読み取ることができるのである。

付記

本論の末頁に付した地図は、もともと部分部分の地図であり、別々に『魯迅全集』（学習研究社、一九八四年十一月～一九八六年八月）第十九巻に収録されているが、全体的把握の便を考慮して、筆者はそれらを一頁につなぎ合わせた。



北京城の地図

鲁迅《一件小事》的空间读解

李国栋

本文以“S门”为线索，从空间的角度阐述了《一件小事》的成因。

本文的结论是：《一件小事》创作于1919年11月22晚至23日上午，1919年11月21日下午鲁迅本人从“绍兴会馆”搬往“八道湾十一号”这一空间移动，为鲁迅创作《一件小事》创造了直接的动机。